

母の町

福生との出会い

山ふところにつつまれた多摩川沿いの村、西多摩郡三田村：、今は青梅市になりました。そこで私は育ちました。観光地化していない自然美は四季折々に、朝な夕なにその表情を変えてあくことなしに、私を楽しませてくれました。

福生という町への最初の認識は母からで、母の生家が永田にあったことからした。製粉業をやっていたのでその水車のこと、庭に植えられた果樹のこと、それらに加えて狐や狸を登場させて昔語り風に思いついた話を母はよくしてくれました。忙しい商いを持っていたこともあって、福生の家へは余り来たことはなかったのだ、この母の遠くを見るような目をみては、福生というところはかなりの片田舎らしい。そう思っていました。

佐久間登世子

戦後の短かい期間、父の友人でもある福生の吉増さんという家族が我家で過ごしたことがあります。上品でふくよかなおばあさま、モダンな夫人、利発げな男の子たちはシモヤケでブクン／＼にふくれた手をした田舎の子の私から何と洗練された人々に見えたことでしょう。福生への私のイメージは一新し、すごく都会的なのだろう、と変わります。

小学生時代、私は、ひ弱で意気地なく友達も出来ませんでした。ただ当時の滝島校長の娘の美子さんとだけは、遊ぶことがあり、この二人が親のはからいで、少し自信のあった算盤を習うことになりました。塾は福生にありました。わたし達は四〇分電車に乗って、駅からジャリ道を手をつないで通ったものです。それ

は大冒険に値することで二人はクタクタになって帰りました。だから情熱家山崎茂男先生の若き日を残念ながら思いおこせないのです。ただ通った道は何故か白っぽく西陽が暑くて福生ってところは何とバサついた町なんだろう、そう感じていました。

私の母は、

「わたしが商いにかまけてしつげが出来ていないから、ちゃんとしたお家へ家事の見習いに出しますよ。そうでないと普通のお嫁さんになれないからね」と気づかしながら四〇代にして逝ってしまいました。それをいいことに私は奉公にも出ず両親が望んだ学部へも入らず勝手な道をえらびました。

三田村から福生へ

学生時代は通学に片道二時間かかりましたから、本数の少ない奥多摩摩行きの電車を待って、いつの間にか出来たのが青梅線沿線の学生の溜り場。当時はしゃれた名の新宿駅近くの喫茶室「マンション」。ここに行くのと知った顔のだからがいて一緒に退屈せずに帰れるという皆の

知恵でした。この仲間が俄然福生住人が多く、早大生の安藤さん、村尾さんがリードしていました。結構気の合う連中にぎやかで、だから、福生って背が高くてもおもしろい学生が多いところだ、と思っていました。

バイトみたいに手伝った会社で知った山の仲間と結婚することになって、彼の家が福生と聞いて、やれ／＼又福生かと思えました。双方後取り同士なので、親たちの手前もあって片寄らずとみつけたのが町内にある家族寮の空室。六畳一間の共同トイレ、水道は二箇所という、すごいところ。寮費は一月三百五十円。三点セットを入れたらまん中二畳分やっ

とあいているだけ、とあって親たちが切ながること。でも私は「神田川」の世界だ！と大いに気に入ってしまいました。

初々しい若妻の私はいよいよエブロン着けて町場の生活をたのしみながらここで先輩の奥さんたちから、あれこれと細かに、洗濯物の干し方から給料前の集金の云い訳のしかた、苦しい時の献立ての立て方に至るまでの生活の知恵を目いっぱい教えてもらいました。

ここでの生活がなかったら、きっとあの世の母から

「ほうら いわないこっちゃない」と叱られたに違いないのです。生まれてはじめて銭湯へも行きました。そこで親しげに近づいて来たキレイな奥さんから出産費用を全部まき上げられる、などという経験もしました。今のトヨタオート辺にあった映画館へ、大きいお腹をかかえて座布団持ってチャンバラを観に行っては、帰りにはやさんで好み焼きを食べるのが楽しみでした。

娘時代、熊川と聞けば、どうしてもブコツな人が多いような気がかりして、余りイメージのよくなかったその熊川の家へ入ってから、それこそ、あれ／＼のうちには年月は過ぎ、まあ苦勞も少々は重ねて、何とかフツウのおばさんになっていきます。粗末な生き方ながらも、いろんな人との輪もひろがって、それぞれに知恵を受けとめ、この町は私にとって相性が良いのか、居心地よいまちでもありません。

ふれあいの中で

ふと見渡せば、学生時代の友人たちもそれぞれが中堅どころで活躍し、「ゴウちゃんゴウちゃん」と私の呼んでいた吉増剛造さんは今や日本を代表する詩人です。山崎先生には何かとお力を頂戴していますし、先生の愛娘のひとみさんは公民館でのサークル仲間、年齢を忘れてじゃれあう仲間です。そういえばこのサークルから巣立ったメンバーも子持ちがふえて、その意味でわたしは九人の孫がいる計算になります。

青梅で過ごした日々よりも、ここで暮らした年月がほんのちょっぴり上まわって、もう母を知る人も少なくなりまして。町はさまざまにその姿を変えてきました。でもやっぱり私にとって福生は母の町です。

このごろふと、母は私にこの町の何を見せようとしたのかと思うことがあるのです。そしてここで生まれた子供たちに、この町をどういう形でよりよく手わたしていってらよいのか、とも考えるようになりまして。

町にはその町だけのもつ色や香りが、たしかにあります。福生……この町がよ

りゆたかに香りたかく、やさしい町であ
ってほしい。ささやかに生きる私もそう

願っているのです。

(はくま・とよこ) 主婦・熊川在住)

重松囃子の発祥とその背景

はじめに

戦後四〇年を迎え、私たちの住む福生も、そして多摩地方も大きく変わりました。新しい自治への歩み、市においてもまだまだ緑が多いと思っていたら、すでにそうではなく、緑を大切に保存しようと呼びかける時代となり、いままでも考えられない現象が起っている。又新しい団地が出来、市民の増加で、新しいエネルギーが新しい街を作り出している。主婦たちのカルチャー活動、コミュニティ活動、そして消費者運動など、文化活動のうねりも起っている。

こうした地域の脈動の中で福生市を中心にして多摩の歴史を考えたとき、専ら門家ではありませんが、私なりに今まで

森田保男

の記録を紐とさながら、先輩諸氏の成果を学び足を使って調べた結果、重松流祭囃子が福生市の歴史の一部を補っているように思い筆を執って見ました。

古谷重松の青年時代までの背景

祭りといえば、祭囃子の音色と山車や御輿、そしてカーバイトの匂いと露店の出店が思いだされるが、今では祭囃子の存在は、若人たちにはどうして、こんなに軽視されてしまったのか考えさせられる。昔は祭囃子はそれぞれの地方の生活の中に、あまりにも密着していた。だが一旦社会変革や経済変革が起ると、その波に乗りきれず色々な問題を残し、縮図

となって消え去り、そして又何時の日か息吹となって生れて来る。ちょうど古谷重松の囃子もそうであった。

古谷重松について所沢市がまとめた『重松流祭り囃子の沿革』の中に、重松は天保元年(一八三〇)三月一七日生。

その二年後の天保三年(一八三二)には大飢饉が起り、大変な時代に生れたのである。貧農者は悲惨な飢餓地獄に陥り、各地で悪徳商人や悪徳地主などを襲い、打ち壊しが起った。そして重松二〇歳に成長した。

明治維新の二年前、慶応二年(一八六六)六月青梅市と山一つ隔てた埼玉県名栗から発生した「暴徒」の群は、各地の豪農や酒造家などを次々に襲い、青梅の街へ、五日市の街へ、そして羽村から福生へ、片や飯能から所沢へ屋敷や蔵を打ち壊して行った。だが多摩地方の暴徒は、わずか三日間で同じ農民兵と一揆が激突し、昭島市築地河原を血に染め鎮圧されたのである。

この暴動は少なくとも幕府の崩壊を早める要因の一つとなった。激動期の農民の姿を鮮明に浮び上らせる多摩地域の幕

末動乱期の象徴的な事件であったろう。

その原因は、米価を中心とする天井知らずの物価高騰で、飢え死に寸前まで追いつめられた貧農民のやむにやまれぬ行動であったろう。積り積った鬱憤が吹き出し、幕末から維新前夜の歴史の胎動であったろう。農民のエネルギ―が新しい時代を求めて、爆発したとも言えなくもない。

又その当時は大変な異常気象で記録にも残っており、四月に大霜が襲い、五月に霰あられが降り、もっとも寒い日は二月より寒く、珍らしい自然現象の年であった。このような天候では収穫間近い麦作は豊作を望むのは無理であったろう。ただでさえ食えない農民の苛立ちも募り、それに百八十度も社会が転換する変革の時代でもあった。

一八五八年から六七年井伊直弼が大老となり、アメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランスと修好通商条約を結び、翌年神奈川・神戸、長崎、函館港で貿易が再開。幕府批判者を罰する安政の大獄。そして水戸薩摩の浪士により大老暗殺。六二年公武合体。十五代将軍徳川

慶喜が將軍職をやめ大政奉還となった。

その中でも五九年横浜開港は多摩の諸村落のあり方を大きく変えた。開港の影響によって経済の変革が起り、穀物の買い占め売り惜しみによる悪徳商人や一部の金持の存在があり、これに対し庶民の怒りからくるさまざまない揆や打壊しがあつた。しかし幕府も飢饉状態を必死でくい止めるよう努めた。村落にも平穏な日々が戻り、正月はセチを祝い、立春初午には稻荷神社に豊作を祈り、ノボリを立て、打ち鳴らす太鼓は村々にこだまし、夏は天王様祭り、秋は氏神様に豊作の祭り、村は囃子の音色と共に年中行事を行い、共同体制で秩序を守り、平和を保つて行くようになった。重松も結婚し、安政六年長女「具満」が生れた。二七歳のときと想像する。

古谷重松の商売と時代の発展状況

一八五九年横浜開港を起点とし、急速な商品経済の波が農村部まで押寄せ、村の共同体にも激しい構造変化を起した。武蔵野新田を中心に穀類の製粉を商売とする「水車稼ぎ」と呼ぶ農民も現われ、

彼等は商売を広げ穀物商・肥料商・高利貸などに発展して行った。山間部の農村も持ち山を切り筏で多摩川を下り、江戸の木材問屋に売り、地元木材業が出現し、資力のある者は山や土地を買い取り商売を広げ、村の在郷商人はやがて商品の流通過程にも介入し、米、生糸、木材などの値を左右し、巨大財力者となった。

外国貿易も搦んで物価は上り、インフレが貧しい者をますます貧しくさせ、零細農民は次々と土地を手ばなした。農間余業として養蚕や織物に働き、農業では食って行けなくなった者は、山村では炭焼きや木こりや筏流しをし、女は養蚕や織物をする人となった。慶応二年、米の相場は一両で一斗二升五合で、前年の倍に値上りした。

この頃重松が家業の藍の商のため福生・秋川・五日市方面に「紫染」に必要な「神の灰」の仕入に往来していた。まだこの頃は神田囃子が一世を風靡してはいなかった。重松もまだ重松流を完成させてはいなかったようだ。

重松は古谷平衛の三男に生れ、成人し古谷源衛の養子となり明治二四年二月六

一歳で世を去った。重松はこの激動期で何時頃より噺子にめぐり逢ったのか。そして噺子に熱中したのか。重松が行商に出られるようになったのは、養蚕が盛んになった明治六年以後と想像する。重松は大変働き者で商売熱心な「みき」と結婚し、安政六年六月長女「具満」が生まれているが、夫婦養子の身であれば、養家の親の手前、家の仕事をかまわず噺子に熱中することは、不自然ではないだろうか。当時家業の主人が芸事などに手を出すと道楽者といわれたであろうし、店の信用にもかかわったであろう。養子の身では考えられぬ行為である。しかし行商に出た重松は先々で祭に逢い、いつ知れず心に神田噺子が宿り、地元所沢以外の村の祭集団の中で噺子を熟知し修得していったのであろう。

そして明治一〇年前後養蚕業が急速に発展した。山間の痩せた土地にも桑が植えられ養蚕がおこり、それによって現金収入が入り「八王子でマヌ、生糸売買高は年間百二〇万円にもなった」といわれるように生活が豊かになり文化も取り入れられる時代となった。

明治のはじめには廃藩置県、岩倉具視の欧米への出発、福沢の「学問のすすめ」、新橋横浜間鉄道の開通、富岡製糸工場の開業、地租改正による金納などの出来事があり、明治一四年には五日市憲法が千葉卓三郎・深沢権八・内山安兵衛等起草され、三多摩の民権運動も盛んとなってくる。

重松噺子について見ると平井・二宮・羽村等の文献からして、発祥地、牛浜新田地域での伝授は明治一四年から二〇年の頃と想像する。このころ養蚕業は発展し紡績工場がおこり、世界貿易が発展し好景気となる。しかしそれは貧農民の女性の血と涙の努力に支えられ発展したのである。

このころの多摩地方ではたくさん機屋が生れた。『神奈川県史料編第2巻』によると西多摩郡熊川村の名望家森田浪吉により創設された森田製糸は、政府の勸業政策で明治一〇年代か

ら機械製糸として抜きんできた大工場となつた。しかし、明治一四年一〇月大蔵卿松方正義のデフレ政策によって養蚕関連企業は不況となり、好景気時代の借金が返済出来ず、困民党事件がおこり、悲惨な運命をたどることになったのである。

重松噺子がなぜ福生で生まれ他地域に広まったのか

明治一〇年頃、養蚕業の急速な発展に

屋 台



より、重松の藍玉の商も忙しくなり、武蔵野一帯に染料の藍が栽培され、それを集荷し「藍玉」に加工し、藍師に販売し家計をたて、更に綿織が盛んとなり近郷近在まで荷車で集荷し、又染料の「紫染」に必要な触媒の柿の灰を求め、福生・秋川流域を往復し、荷車で所沢へ日帰りも出来ず商売関係の家で宿泊していた。その頃養蚕不況に加え秋川流域では疫病がはやり、その上、蚕に病気が発生して大きな打撃を受けた。村人は信仰心を強め、礼拝明神社（熊川神社）に無病息災・五穀豊穰を祈願したのであろう。さらに祭囃子を知っていた重松に余暇を利用して伝授を求めたのであろう。

囃子連の新井勝氏が重松囃子を分析したところ、驚いたことに四分の四拍子の旋律の楽譜で始まり、どうしてこんな立派なリズムが付いて出来たのか考えさせられたとのことである。そして、「そうだ神田囃子の旋律に機械のリズムが組合さったのでは」と考えざるをえないということになった。

それでは、なぜ牛浜新田で発祥したのかを考えたとき、森田製糸所が重要なポイントになって来ると思われる。鍋ヶ谷戸の古老が森田製糸所の土蔵の中で囃子についての文書を見たという。古老の話では、このあたりの機屋ではむかし夜になると近在の村から若衆が集まってきた。そうして歌を唄い、トンカトンカラ機の音に合わせ男女が語りあった。そんな土壌の中で重松は若者と泊り、神田囃子をアレンジし、重松の囃子のリズムとしてとり入れ伝授したのではないか。

そうでなければ邦楽や三味線など習得していたとは思われない重松に、こんな洋楽のリズムが生まれる訳がない。だから重松は機械の音で色々な旋律を学び、この近在に広めたからこそ近郷近在の人達が福生から伝承されたと言っているのであろう。そこにポイントがあると思う。機械の歌の中にある、

「へ機織りバッタでいやならおよし、あたしやお百姓大きらい」

「へお前一人と定めたからは男猫でも抱かせない」

等のリズムは囃子の旋律に大変あうと思う。

以上のことから神田囃子とちがった要

素が出てくると思う。すなわち囃す最中に締太鼓同士の打ち合い、相手の囃子太鼓の中に己の締太鼓を打込み、太鼓のバチとバチの間隙に打込で行く。太鼓に音を絡ませ相手の技量を見て打込んで行く即興的な打法をチラシと云うが、それが洋楽的なジャズの様相となり、非常に賑やかに車曳の威勢を盛り上げ、見物人を踊らせ、民衆の耳を魅了し祭りを盛り上げる要素となったと思われる。今日でも囃子を囃す人の話では、勇壮な旋律に乗った時、陶酔の坩堝くわぼとなり、生の喜びを感じるといふ。だからこそ祭囃子は人の心の中で燃え、老も若きも感動し、共通の場で理解しあえる素晴らしい遺産であろうと思う。

どうか福生で生れた重松囃子を大切に育成保存下さることを願い、書き尽せない事が多々ありますが筆を置きます。この執筆には朝日新聞社発行の『多摩の百年』（上・下巻）を参考引用させていただきました。

（もりた・やすお 牛二囃子連顧問・牛浜在住）

一本の道

成田和子

福生駅の西口から埼玉銀行の前を通り、清岩院橋を渡って市民体育館に通じる道は、橋を渡り終わるとゆるい坂道となる。この坂をはさんで両側に広がる地域が、私が子供時代を過ごした中福生である。

昭和のはじめ、この辺りは殆どが農家であった。広い庭があり、どこの家でも屋敷の廻りには、ケヤキやカシの木を始めグミやザクロなどが植えられていた。グミの実の色づく季節は、こどもたちにとっても楽しい季節であった。

道が、人家を過ぎる辺りから多摩川の土手にかけては、桑畑や畑が続き、今の北田園二丁目辺りからも、鉄橋を渡る五日市線の姿が眺められる程であった。

道路に遊ぶ

舗装されたこの一本の道は、当時の主要な府道（都道）であったが、それと共に、大ぜいの子ども達が集まる遊び場にもなっていた。中には、こどもを背負った人もいたので、〇歳から一五・一六歳位までの者が集まった。

お手玉や石けりをするこどもあれば、じゃんけん遊びで道路を往ったり来たりして競うこともあり、時には、リリアンや毛糸を使って紐を編むことも、こうした所で、子供から子供へと教えられて覚えていったものである。

学年が進むにつれて、水汲みや掃除など、家事の手伝いの合間を縫って遊ばなければならなかったし、時には、けんかもあったが、大きい人達といっしょになって遊べることが、何よりも嬉しいことであった。

馬糞そうじ

日に何回か、五王バスが通っていた。

時々自転車も走ったが、牛や馬に荷物を引かせて、ゆっくりと運んで行く人の姿もあった。道路には、ときどき牛や馬の糞が落ちており、湯気の立つ馬糞がおかしなくて、笑いこけてしまったこともあった。また、ある時は、裏の道に馬糞があるから片付けておくようにと祖母から言われながら、そのままにしてしまい、「牛のにくらべたら、馬のなんかきれいなものだ。」

と叱られて、しぶしぶ馬糞の掃除をしたこともあった。

軍靴の音

地ひびきを立てながら、戦車が何台も通ることがあった。戦車の通り過ぎたアスファルトの上には、キャタピラの跡が白く残されていた。また、演習中の陸軍部隊がやってきて、家々に分宿することもあった。

昭和一〇年の秋季大演習の時には、私の家が、中福生・萱戸地区（志茂一）の中隊本部となったため、到着や出発の時など、武装した兵隊で庭がいっぱいになった程であった。兵隊さん達のきびきび

した動作や、父母や姉たちの、食事だ布団だと準備する雰囲気など、家じゅうが明るく活気に満ちていて、こども心にも嬉しい日であった。

当時、「兵隊さんが泊る」ということは、非常に楽しみだったらしく、生活の苦しい時代でありながら、どこの家でも精一杯のもてなしをしていたようである。父も、役場より支給された費用以上の用意を、母や姉に指図していたそうである。夕食時に、くつろいだ兵隊さん達が、父とお酒をくみ交わしながら、楽しそうに談笑していた姿など、子どもにとって嬉しい光景であった。

しかし、翌一年、二・二六事件が起きた時、中福生に泊った人たちが蹶起部隊に加わっていたという話は、連日話題になった。特に、庭に整列した兵士達に訓示をし、木村さんの家（現・木村輝幸氏宅）に泊った人が、蹶起した将校の一人安藤大尉であったということは、大臣達が殺害された事実と共に大きな衝撃だった様子で、小学校二年生だった私にも、日本に恐ろしいことが……という不安を強く感じさせた。

今年には二・二六事件後五〇年である。この度、文芸春秋三月号に、二・二六についての座談会記事が掲載されているのを知り、編集部に依頼したところ、早速、御協力頂けたため、出席者の一人湯川様（清原少尉）に福生に宿泊した当時のことを書面でお尋ねすることができ、麻布歩兵第三連隊が軍旗を奉じて宿泊されたこと、捧じた連隊旗手は、二・二六で刑死された高橋少尉であったこと、福生周辺に宿泊した人の約半数が二・二六の行動に加わったことなどを伺うことができた。

麻布歩兵第三連隊といえ、二・二六事件の主力であり、陸相官邸に於て自決した野中大尉、刑死した安藤大尉、坂井中尉、高橋少尉、更に、死刑の求刑を受け、無期禁錮の判決となった清原、常盤、鈴木、麦屋の各少尉が所属していた部隊である。

また、私の家に宿泊された五人の中の一人、小久保曹長は、その後満州の前線に送られて戦死し、渡辺軍曹も、「これが最後と思う」旨のハガキを世田谷区内から父宛に郵送してきた後に、

やはり満州で重傷を負い、当時は、ラジオや新聞で発表されていた戦死者や負傷者名の中に、その名が載せられていたそうである。（姉たちの記憶）

二・二六事件は、昭和の悲劇とも言われている。昭和維新を念じて蹶起しながら、「叛徒」としての処断に泣いた青年将校や下士官、兵の人たちが、その三か月前、福生のまちを行進して行った勇姿を思う時、軍靴の音もまた遠く聞こえてくるのである。

干草のにおい

日中戦争（支那事変）が起きると、出征兵士を見送る人の列や、不幸にも戦死した人の遺骨を迎える悲しい列が、多摩橋に向かっても通って行くようになった。道端には、軍馬の餌にするための草が干され、供出された干草を運ぶ車も目に入るようになった。

陸軍航空審査部や整備学校が、市の東側台地にできた一四・一五年になると、軍服を着た人たちの散策する姿があちこちで見られるようになり、やがて、軍人家族の間借りする家も増えて、まちの文

化も人びとの心も、次第に戦争の色を濃くしていった。

召集される人や徴用される人の増加する一方で、工場の軍需工場化も進み、食糧や日用品は勿論、学用品も次第に乏しくなっていた。また、出征兵士のいる農家への勤労奉仕が、高等科の人たちによって行なわれ、養蚕農家の桑もぎや繭かきの手伝いにも動員されるようになった。こうした中で、こども達が道に集って遊ぶ楽しみは、次第に減らされ、消されるようになってしまったのである。

空襲の朝

太平洋戦争が始まり、軍事色が一層強まってきた一七年四月、小石川の学校に入學して寄宿舎生活を送っていた私は、勤労働員されていた亀戸の工場が、二〇年三月一〇日の大空襲で焼けてしまったのを機に、福生に帰った。

夏の始め頃だったと思う。

防空頭巾や、非常食糧のいり豆、三角巾などを入れた救急袋を肩に駅に向かっていった。駅の近くまで行った時、突然、空襲警報が鳴り出した。急いで引き返し

たが清君院橋の上まで戻った時には、ゴウゴウと音を立てながら敵機の編隊がやってきてしまった。

「機銃掃射でやられる!!」

との不安が、心の中を駆け抜けた。私は、とっさに、上水横の道端にあった素掘りの防空壕にとび込んで身を伏せた。息のつまるような何秒かが過ぎ、飛行機は不気味な音だけを残して、東の方へ飛んで行った。

戦争の後

戦争は終わった。やり場のないむなしさと、いいようのない開放感が残った。しかし、アメリカ兵が進駐してくると、また別の怖さが伝わってきた。何か言われても、「私は英語が話せません」とだけ言っていて、絶対に笑顔なんか見せてはダメだと聞かされていた。幼い日遊んだ道路は、こわい場所となった。

暫らくしたある日、家の近くで二人連れのみ兵がニコニコしながら話しかけてきた。一瞬おどろくと共に、覚えていた英語（アイキャン、スピークイングリッシュ）を、必死になって思い出したが、

声にはならなかった。

復員兵や引き揚げの人たちが帰り、人びとにやっと着きつて落着きの見えはじめた二三年、師範学校を卒業した私は第一小学校に勤め、この道が、子ども達との生活につながる大切な道となった。

福生は、昭和史六〇年の流れの中で、村から町へそして市へと変わった。戦争という激しい動揺の中で、文化もまた大きく変わっている。福生に生まれ、福生に育った私は、人生の殆どをこのまちで過ごした。「ふっさ」は、わたくしにとって、ふるさとである。

中でも、一本の道を通した古い思い出が、今も心の中で鮮明に生きているのは、子供から青年期にかけてを過ごした中福生という地域の、豊かな自然や、人びとの交流があったからではないだろうか。経済的にも苦しい時代でありながら、美しい静かな自然と、人びとの素朴なぬくもりとが、私の中の福生を育ててくれたように思えるのである。

(なりた・かず子 元福生一小教員・福生在住)